豊かな自然の恵みを子どもたちに

～粟野川と共に生きよう会の取組～　　【下関市　豊北中学校区（粟野地区）】

地域の概要

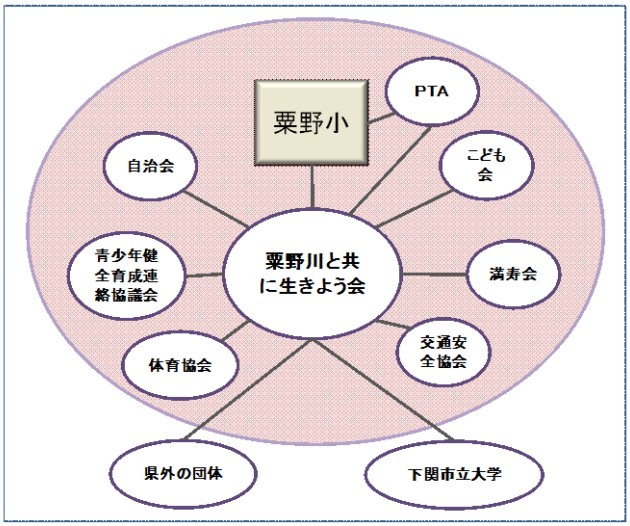
下関市豊北町は七つの広域地区で構成された、農業と漁業の町です。北は日本海、西は響灘に面し、青い海や白い砂浜、そして狗留孫山をはじめとする緑豊かな山々に囲まれた、自然豊かなところです。また、全国的にも貴重な国指定史跡「土井ヶ浜遺跡」があり、校区では、豊かな地域資源を生かした特色ある教育活動が実践されています。しかしながら、少子高齢化にともない、校区の児童・生徒数は年々減少してきています。

その中でも粟野地区は、地域の生活や文化、歴史が粟野川と密接にかかわっており、今でも人々の暮らしや心の中にしっかりと根付いています。

人　口		10,857 人
世帯数		4,781 世帯
対象校及び児童・生徒数	豊北中学校	219 人
	神玉小学校	68 人
	角島小学校	29 人
	神田小学校	39 人
	阿川小学校	37 人
	粟野小学校	25 人
	滝部小学校	108 人
	田耕小学校	26 人

組織の内容

「粟野川と共に生きよう会」（会員 12 名）は、下関市豊北町粟野地区に流れる粟野川流域の豊かな環境を守る活動を中心に流域の振興を図り、そこに住む人とのつながりやふれあいを大切にし、人と自然が共生できる地域社会づくりを行っていくことを推進している会です。



活動は、県や市の助成を受けながら、美しい流れや粟野川の自然を維持して守っていくために、貴重な森林の整備や造林を行い、その木を用いて自ら焼いた木炭や竹炭を川に入れることから始め、今年で 10 年目になりました。

会の構成員は、自治会の会長として地域を快適で住みよくするために活動されている方、青少年健全育成連絡協議会の会員として青少年健全育成のためにかかわられている方、子ども会の会長や役員、児童委員、体育委員、登下校の子どもの安全を見守るために見守り隊として活動されている方など、日ごろから地域に深くかかわっていらっしゃる方々です。そのために、「粟野川と共に生きよう会」の構成員だけで活動するのではなく、それぞれの構成員のつながりから会の活動を発展させていきました。また、下関市立大学や他県で同じような活動をしている団体と連携するなどネットワークを広げていきました。

さらに、「粟野川の恵みを子どもたちに十分に感じさせたい」という思いから、小学校と連携して主に環境教育に関する学習支援を始めました。具体的には、青のり採りやそばの種まき、木炭づくり、芋ほり、そば刈りなどです。支援にあたっては、ＰＴＡや漁協とも連携して地域ぐるみで子どもたちを育てようと心がけてきました。そしてこの取組が地域や伝統や文化を踏まえた教育に直結する活動であるとして、教育課程に位置付けられ、定着しています。

これまでの活動に加え、今年度から旧保育園を活動拠点にして、放課後の子どもたちの居場所づくり支援や市場として農産物の販売を始めました。子どもたちと地域の高齢者が集まる場を提供することにより、人々の生きがいの創出や地域の活性化につながれば、と願っています。

主な活動の紹介

○学校支援活動

・学習支援
　青のり採り体験活動
　木炭・竹炭作り（校地内に炭窯を設置）
　陶芸教室
・環境整備
　定期的な校内整備作業
　学期ごとの親子清掃
・安全支援
　新入児の下校指導
　下校時の見守り　等
・その他
　読み聞かせ
　水辺の教室、カヤック教室
　ほたる観賞ナイトウォーク

青のり採りの様子

炭作りの様子

校地内に設置した炭窯

○放課後の居場所づくり

旧粟野保育園を活動の拠点として地域の住民が集まり、子どもも集まる場所として毎週木曜日に読み聞かせ教室を実施。夏休みには粟野川での活動を中心にしながら地元住民と下関市立大学生をスタッフとして、合宿スタイルの子ども教室も実施。

夏休み放課後子ども教室

今後の取組

ボランティアの募集や学校支援の過程でＰＴＡとともに活動することの意識がお互い高まっていったこと、体験活動を通して子どもたちが粟野川を大切にしていこうと感じることができたことが大きな成果です。

また、限られた地域人材での活動継続を大切にしながらも、外部に可能性をみてかかわりを広げていくことが今後の取組の課題となっています。

粟野小学校区のみならず、他校区においても地域住民による学校支援活動が展開されています。また、来年度以降に各学校にコミュニティ・スクール運営協議会が設置される予定です。中学校をはじめ他校区とも連携を図りながら、地域と学校が協働して子どもを見守り育てるシステムを構築していきたいと思います。

コーディネーターさんにインタビュー

Ｑ：子どもたちへかかわろうという一番の強い思いはどこからでしたか？

Ａ：中学校が統合して、地元の中学校がなくなりました。すると…朝夕、町を歩く中学生の姿を見ることがなくなってきました。町の宝である子どもたちの姿が見えなくなってきたときに、もっと自分たちから学校や子どもたちへかかわりたいという思いが強く出てきました。子どもへ直接かかわることが増えてきたことが自分たちの喜びになってきています。